

専門分野別による景観概念の変遷に関する研究 ー特に植物学系分野、文学系分野に関してー

Changing Concepts of Landscape (Keikan) Used in Different Fields

-With a special emphasis on fields related to botanics, and literature-

渡 部 章 郎

Akio Watanabe

2004年には景観法が施行され「景観」は法律用語にもなった。しかし「景観」は以前から様々な分野で使用されており「景観」を導入した経緯によって、「景観」の使い方も異なっており、そのため分野によって、景観概念が異なっている。本研究では、「景観」概念に関して、その変遷を専門分野別にたどり、景観概念の相違点を明らかにしようとするものである。景観概念は、大別すると二つの系統がある。一つは、ドイツのラントシャフト概念に基づくものであるが、Landschaftには①地域（同質の像を見せる地域）②風景（人間に見える地域の像）の意味がある。地理景観は①となる。地理学、景観生態学の分野は①である。もう一つは、地理学以外の分野の景観関連の語として、②の概念が中心である。これは英語 Landscape の scape、景観の観、風景のように人の視線、見えることに重点がおかれている概念である。「景観」の語は植物学者の三好学が初使用したが、植物学で景観はあまり使用されていなかったが現在では景観生態学の分野でランドスケープ・エコロジーとして一分野を確立している。文学系では視覚中心とした「景観」はほとんど使用されず、「風景」を使っている人が多い。風景は主体として人に比重をおき、場所への思い、原風景、心象風景といった点から景観（風景）概念を検討している。

キーワード：景観、ランドスケープ、ラントシャフト、景観概念の変遷、専門分野別景観概念

1. 研究の目的

2004年、景観法が施行され、景観形成・保全に対して期待が大きいものになっている。景観法の目的は、「日本の都市、農山漁村等における良好な景観の形成を促進するため、景観計画の策定その他の施策を総合的に講ずることにより、美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現を図り、もって国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の健全な発展に寄与することを目的とする」¹⁾としている。しかし、法ではあえて「景観」用語の定義を規定していない。それが市民には景観概念を漠然としたものとしている。景観は、研究分野が多岐にわたっており、学術分野によって景観の概念も異なる。そこで筆者は、専門分野別に、景観概念の変遷や概念の明確化が必要と考えた。景観の語が使用されてから約100年を経過しているが、その間の専門分野の景観関連の文献を精査し、景観概念の変遷をまとめ、概念について分野別の比較検討をおこなうことにした。

2. 研究手順

1900年(三好学によって1902年に「景観」用語の初使用された)～2008年までの期間を中心に、景観及び景観関連(ここでは景観、風景、Landschaft、Landscape)の語と概念(concept)に関して、記述のある論文、著書等の文献を調査し、その中の主要な文献を時系列、分野別にまとめる。また、景観概念の変遷の過程や背景、分野の特徴をまとめ評価を行う。

研究者の分野に関しては、①植物学系 ②文学(その他)系 ③地理学系 ④造園系 ⑤工学系と5分類した。そのうち、今回の詳細検討は①植物学系 ②文学(その他)系の2分野とした。②文学(その他)系には、他の部門に含まれない、理学等の部門も含むことにした。

3. 分野別の景観概念の変遷

まず始めに、研究分野が異なると、専門用語及び一般用語としての「景観」の概念が異なっている。各分野の代表的な辞書により、分野の「景観」の標準的な意味を確認した。なお、「景観」の語彙が確認できた、最も古い辞典は『大辞典』(1935)で、「景観 ①景色。風景美。眺望。②自然と人文とが種々交錯している現実の態様」²⁾と記述されており、1955年に出版された広辞苑がほぼ同様な内容になっている。

表－1 辞書による、専門分野別の「景観」の意味

	一般(文学系)	地理学系	造園学	工 学	
辞書	広辞苑 ³⁾ (1955、2008)	地理学辞典 ⁴⁾ (1973、1981)	造園用語辞典 ⁵⁾ (1985、2002)	建築大辞典 ⁶⁾ (1974、1993)	土木用語大辞典 ⁷⁾ (1999)
景観	①風景外観。けしき。ながめ・また、その美しさ ②自然と人間界の事が入り交じっている現実の様	(E) Landscape (F) Paysage、 (G) Landschaft 地理学で用いる景観(=地理景観)とは、「任意の広さの地表面断片であり、その地表面断片は、外貌と内在する諸現象により、また内外の位置関係によって一定の性質を持つ区間単元で、別の性格を持つ周囲の地表面とは区別してとりだせる。	Landscape、Landschaft(独) 人間をとりまく総合的な眺め。[景]には「ひかり」、「ありさま・ようす」、「観」には「見方・とらえ方」という意味が含まれている。すなわち景観(風景)という現象は、単に視覚的対象の眺めのみでなく、それをなどの眺める主体(人間)に形成されるイメージや印象などの心的効果との関係によって成立する。「景域」には地域的な広がりや生態秩序概念が含まれる。	Landscape、townscape ①風景、景色。②ある土地において自然と人間の交渉によって形成される可視的環境のことをいう。これは自然的条件や人間生活の歴史的試練を受けつつ互いに影響しあいながら変容する。 景域： (独) Landschaft 同質の景観を呈する一定の範囲の地域を意味する用語。景観、風景概念が環境の視覚的、意味的側面を強調するのに対し、この概念は景観の地域的広がり、と環境の生態的秩序性、と土地利用上の合理性を強く意識している点に差異がある。	Landscape 地上の眺め。環境の眺め。景色は眺めと同じく目に映る客観的な姿形。地理学や生態学の分野では地域の概念=景域、眺めの概念=景観と訳語を分けて、「景域」という言葉が使われるようになった。景観は人間と環境の関係を視覚的にとらえた人間-環境系の側面(視環境)であり、主体としての人間が環境の客観的な眺めに対して主観的に反応する心理現象として(知覚、認知、記憶)に分けられる。
	植物学系				
辞書	生物学辞典 ⁸⁾ (1996)				
景観生態学	景観生態学(英 Landscape ecology)自然生態系に大きな影響を及ぼしている人間の存在をも系に取り込んだより高次の系を景観としてとらえ、その構造・機能・動態を研究しようとする生態学の一分野 (「景観」のみの語彙は記載されていない)				

4. 分野別の景観文献の変遷

(1) 植物学系の景観概念の変遷

上原敬二による「景観は中国の詩文に用いられた用例を知らない」⁹⁾という記述があるように、景観は日本で創作された言葉とされている。景観の始まりとして現在でも引用されているのが地理学者の辻村太郎による「景観は独逸語の Landschaft に対して、植物学者の三好博士が与えた名称である」¹⁰⁾という記述である。しかし、三好学に関連する、「景観」用語・概念に関する研究は少なく立証はされていなかった(2008年になって小野良平による本格的な三好の研究が発表¹¹⁾されたにすぎない)。そのため三好の文献を精査し、そこで「景観」用語の記述が確認できたのは28文献にのぼった。三好自身35年の長期間にわたり(図-1参照)使い続け、植物学系以外の地理学系(辻村太郎)、文学系、造園学系にも影響していることが判明した。

三好が「景観」の用語を初使用した文献は、1902年『植物生態美観』¹²⁾で、景観の用語が4箇所出現する。植物の景観と植物に限定して使用している。景観を表題にした最初の書籍は『日本植物景観』¹³⁾英訳表題は ATLAS of JAPANESE VEGETATION となっている。この書籍は1914年までの10年間にわたり第15集まで出版された。三好の植物景観の概念に関する記述が1906年、「植物の景観」¹⁴⁾に確認できる。以下に引用する。「昨年から『日本植物景観』と題する植物の写真画集を著した事に就て、或人々から其の趣意を尋ねられたことがあった。依て茲に該書集の目的と併せて植物景観の意義に就いて少し述べやうと思ふ。それぞれの土地には何れもその土地固なる植物の景観がある、此景観というのは、独語で、フェゲタチオンス、アンジヒテンと称するものであって之を分析して見ると種々の分子が含まれて居る、先ず其一は一の土地に固有なる所の植物区系というものと、又一には植物群落というものであって、其外に人間の直接又は間接の作用によって出来た所の培養または半培養の植物である」と記述しており、一般的にドイツ語フェゲタチオン (Vegetation) は植生、アンジヒテン (Ansichten) は光景、風景、眺めと訳されているものと推察できる。景観は「植生」という植物の生きた集団、と視覚による「眺め」の意味を含んだ概念と考えら

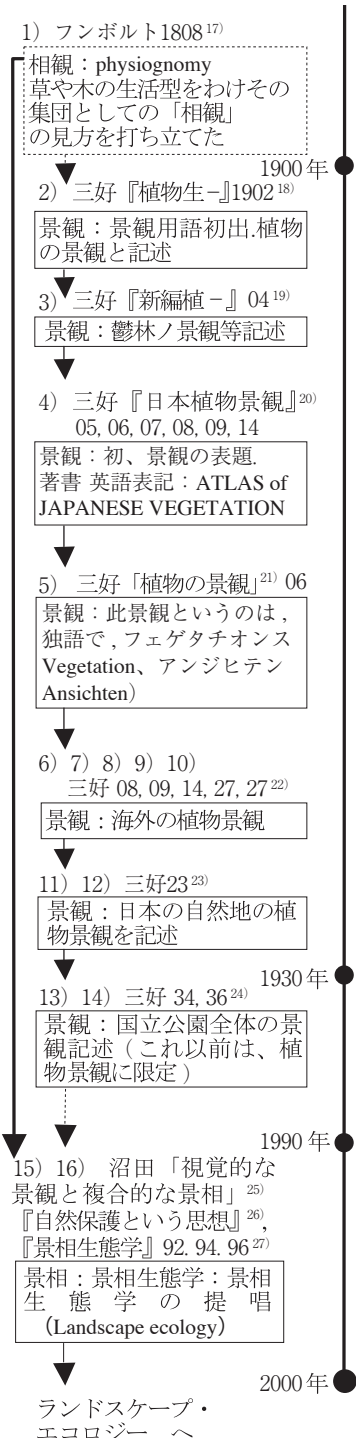


図-1 植物学系「景観」用語
変遷図

れる。また、小野は三好の景観の使い方として「景色・風景と違い、科学的に対象を記載しようという態度の表明を意図した言葉であったことが仮説的に考えられる」¹⁵⁾としている。三好は「植物の景観」¹⁶⁾の中で、ラントシャフト (Landschaft 風景・景観) や相観 (Physiognomie) の直接の記述はないが、フンボルトに関しては「全體世界各地に旅行して其土地に特異なる景色が見られる事に就いては、今より已に百余年前アレキサンドル、フンボルト氏の観察したのであって」と記している。また『増訂植物生態美観』²⁸⁾ (1912) では「各地の植物帯の景観を記述した著書は古くからか数多あるが、其の中最も著しいのはアレキサンドル、フォン、フンボルト氏の『植物風致論』である」と述べている。小野良平はこの『植物風致論』がフンボルトの著作の “Ideen zu einer Physiognomik der Gewächse” を指すとしている²⁹⁾。そうすると、三好は Physiognomik を風致と訳したと考えることもできる。筆者が “Ideen zu einer Physiognomik der Gewächse” を直訳すと「植物の相観学に関する観念」になる、この本にはフンボルトの Physiognomik の考えが、次のように示されている。「地域 (Weltgegenden) の多様な性格があらゆる現象の外観 (Erscheinungen) に同時に依存しているとき、すなわち山の輪郭、植物・動物の相観 (学) が、また空の青さや雲の形、気圏の透明さが総合的な印象を生じさせているとき、主に植被がこうした印象を特徴づけていることを否定することはできない」や「16 の植物形が、主として、自然の相観を決定している」³⁰⁾ というように Physiognomik (相観学) には動物まで含まれている点等の違いがあるが、主に外観の特徴を示しており、景観の語との類似性が見られる。

三好の没後「景観」は、植物学系ではあまり、使用されなかった。『生物辞典』では「景観」の語彙の説明はなく、「景観生態学」の語彙のみ記載されている。

1990 年代に入り、日本の代表的な生態学者である、沼田真は生態学の分野から『視覚的な景観と複合的な景相』(1992)、『自然保護という思想』(1994) で景観用語と概念について述べている。「景観 (Landscape) という言葉は、ごく一般的にも使い、風景、景色、景域などともいわれる。応用生態学の一分野としては景観生態学 (Landscape ecology) があり」、「景観生態学という場合は、生態系生態学 (ecosystem ecology) の一部と見ることもできようし、原始地域から都市までの生態系の景観要素の分布パターンや時間的変化などと人間活動との関わりを、学際的、統合的にとりあげる人間生態学ということも出来よう」³¹⁾ としている。『景相生態学』³²⁾ (1996) では「五感の世界を含めて“景観”を知る、それだけに英語でいうランドスケープ (Landscape、ドイツ語では Landschaft、ランドシャフト) を景観、風景、景色、景域などとやくすのはきわめてあきतरない。そこで筆者は生態系の構造、機能、動態のすべてを含むもの、いわば景観が全体としてもつ相 (physiognomy に近い) として“景相”という表現をとったのである。したがってそれは、狭い意味での景観である風景 (landscape、skyscape、seascape など) のみでなく、耳によるサウンドスケープや、その他嗅覚、味覚、触覚の世界も含めた五感の生態学、さらには認知科学 (cognitive science) で説明されるような心の世界まで含めたものになるであろう」。沼田は「景観」「景観生態学」ではなく「景相」、「景相生態学」と主張し、視覚のみならず五感によるとしている。

三好は 1902 年「景観」を初使用し、そこから景観の歴史が始まったといえる。三好の記述

では景観概念として、植生 *Vegetation*、光景、眺め *Ansicht* の両方の意味を含んだもので、当初、植物景観というように、植物に限定していたが、1930 年代に入って、主に自然地全体の景観を示す用語となり、その後、様々な分野が「景観」を使用し、主に都市景観というように都市に使用されるようになった。現在では、自然景観、都市景観と幅広く使われており、前述のように 2004 年には「景観法」が施行され法律用語になった。三好が事例にあげたのはフンボルトであり、「景観」はフンボルトの相観 (*Physiognomie*) や風致に一致はしないが、近い用語といえる。その後、景観は植物学界では、あまり使用されなかったが、1990 年代に入り、生態学者の沼田はランドスケープを景相と訳し、景相生態学を提唱している。景観は景観生態学、ランドスケープエコロジーとして地域や生態学と結びつき、地理学や緑地学を含めた研究対象として、一分野が確立された。

(2) 文学系の景観概念の変遷

19 世紀後半から 20 世紀初頭、開発から環境・景観・風景保護への価値判断の変化がおこり、その当時様々な「風景論」関係の書籍が発刊された。代表的な書籍は、ラスキン『近代画家論』全 5 巻 (1843-60)、ハーマトン『*Landscape*』(1885)、ジョン・ラバック (エイベリー卿)『自然美とその驚異』(原書 1892) で、日本でも文学系以外にも広く影響を及ぼした。今田敬一は「風景論の著書」³³⁾の中で、上記を含めて 50 冊もの風景関係の書籍を紹介している。

文学系分野は大半が風景論で、景観論は少なく、文学系分野を考察するために風景論は不可欠であることから、この分野では風景論及び景観論を考察することとした。

日本でも明治以降、欧米の影響を受け、自然景観の考察も拡大して、1894 年に志賀重昂の『日本風景論』³⁴⁾が近代日本の風景観を確立した。その書籍では「一 日本には気候、海流の多変・多様な事 二 日本には水蒸気の多量なる事 三 日本には火山岩の多々なる事 四 日本には流水の浸食激烈なる事」と地理学の知識で日本風景の特質を示した。志賀は地理学者であったが地理学界の景観論・風景論には影響を与えなかったが、『日本風景論』は当時のベストセラーになり、一般の人々の風景観や専門分野としての文学系や造園学系には大きな影響を与えた。日本の近代風景論は志賀から始まったといえる。

1905 年、小島烏水の『日本山水論』³⁵⁾刊行された、これは戦前の三大風景論の一つといわれているもので、志賀の風景論、特に登山振興の影響が大きい。全般にわたって山岳について記述されている。その点で、山岳美論、日本山岳論となっている。1910 年、伊藤銀月『日本風景新論』³⁶⁾が出版される。内容は ①日本の風景は松の緑素と桜の白素での日本的趣味をなす ②日本の風景は山岳渓谷原野、及び海岸河岸の輪郭をなす所の曲線の、柔にして秀でて適度に美的なること、之が衣装なせる草木の、姿態色相及び密度共に宜しきを得たるとの上、水蒸気が適度に風景を美化する作用のため等、『日本風景論』に対して海岸風景にも着目して新論を述べている。

1915 年、心理学者のヘルパッハによる『風土心理学』(原書 1911) が翻訳され、風景 (*LANDSCHAFT*) の明確な定義が「風景とは土地の表面の一部と、それに相応せる天蓋の一部とが、吾人の心につきおこす、惹き起こす全感覚的印象を謂う」³⁷⁾と記述され、風景研究分野

の参考とされた。

1921年、ジョン・ラバックの『自然美と其驚異』³⁸⁾ (板倉勝忠訳・原書1892)は自然美論、自然要素及び英国等の風景を論じている。ラバックの著書は志賀の『日本風景論』にも影響を与えたとされている。『自然美と其驚異』³⁸⁾の中で、板倉がViewを「景観」と訳しており、地理学分野で景観の用語が主に使われるのは1930年代からであるから、これは非常に早い出現であり、三好学の「景観」の引用と考えられる。1924年、理学博士の渡辺十千郎は『風景の科学』³⁹⁾で、風景に関する地形、地質、気象等の科学的考察を試み、風景と容貌と輪廻・岩石・水・環境・装飾美や植物景観に関して、詳細に記述している。植物景観美の要素という項目をあげており、これも景観を使用した早い例である。

和辻哲郎は『風土』⁴⁰⁾ (1935)で「ここに風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である」と風土の定義の中の一要素として、景観が含まれている。1937年安倍能成は「日本風景と国民性」⁴¹⁾で、「風景とは自然の姿である。併しそれは人間を交えた自然であり、人間から見られた自然である故に、単なる自然科学的对象としての自然形態ではあり得ない。自然としては天と地（水を含んでの）から成る故に、風景は天地人を通じての自然の姿だったらいいかも知れない。人間との交渉に於ける自然は普通に風土とよばれる。そうして風景は風土の中我々の視覚に映ずる自然の姿を指すのである」としている。1939年、脇水鐵五郎は『日本風景誌』⁴²⁾を太平洋戦争直前に出版した。著者は地質学者であり、著名な風景地について地質学的に説明を加えた風景論で、多くは雑誌「国立公園」等に記載したものを再編集したものである。冒頭に「日本が世界一の風景国であることは、今や世界の定説であるといってよい」等、風景認識による日本精神の高揚を謳っている。景観の語が複数記載されている。

戦後では、1961年心理学者である稲垣光久は『日本のこころ』で、風景の概念について、次のように述べている。「風景とは、①形態、②印象、③表現の三者を含んでいる。成因的にみると、形式上は人類の史的経験や直感を圧縮したものであり、内容上は物体の性質に即した印象をいう」。風景の定義では「風景とは自然を主とし文化を従として、これに対応する空間を含み、視覚を中心とし全感官が協力する美的景観をいう」⁴³⁾としている。

1975年、哲学者の澤田允重は『認識の風景』⁴⁴⁾で文学系分野の中で、初めて風景概念に環境に視点を当てたもので、「風景は目に見える私の環境である。すべての生物は特定の自然環境のなかでそれとの相互関係の下に生存している」という生態学 ecology の原則の人間的経験への最初の、そして最も根源的な現われは個々の人間がそれぞれ自分の風景をもっているということである」「私は私の風景的環境をもって（知覚して）おり、そしてそのなかで生きている」「私の知覚風景はどこまでも私の風景であり、私にとっての風景である。他人が見ているであろう風景と私が見ている風景とは決して同一ではしたがってすべての人に共通な普遍的な風景などというものは存在しない」と述べ、多くの分野に影響を与えた。

1972年作家である、奥野健男が『文学における原風景』⁴⁵⁾を発表した。「幼少年期の、さらには青春期の自己形成空間として深層意識の中に固着し、しかも血縁、地縁の重い人間関係もわがちがたくからみあった、彼らの文学を無意識に規定している時空間、それを象徴するイメー

ジを“原風景”と定義したい」、また「“原風景”は作者にとって客観的には描写し得ぬ風景なのだ。作者の“原風景”に対する眼は、行きずりの観光客や旅行者の眼はもちろん、取材にきた文学者、美を求めて歩く画家、学術調査にきた学者などの眼とも全く異なる。そういう他者の眼で眺めることも描写することも出来ない、もっと内部に向かって屈折したものなのだ。“原風景”とは他人ではなく、自分自身にほかならないのだから」と記述し、幼少期や青春期の多感な頃に経験した風景は、外来者の見える風景とは全く異なった原風景としてとらえる考え方はその後の研究者の風景論に影響した。

勝原文夫は『農の美学』（1979）、『環境の美学』（1999）等、風景と景観の概念について述べている。『農の美学』⁴⁶⁾のなかで、奥野の原風景論にふれ、「自分が生まれ育った故郷の景を中心とした幼少時代、青春期の自己形成空間」を“原風景”として捉える考え方のあることを知り“原風景”は作家という特殊な人々のみならず、一般庶民にとっても美意識の基準となる。そのような個人の“原風景”の中には、純粋に個人的な原風景のほかに“国民的原風景”とも呼ばれるべきものが重層的に共存し“国民的原風景”の形成には国民的伝統も大きく影響する」という考え方を示した。もう一つは探勝の風景と生活的風景を分離してみるという考え方で「一般的には、旅行者の審美的態度が探勝の景観に加わって探勝の風景を、定住者の審美的態度が生活景観に加わって生活的風景を成立させる」と記述している。

勝原は、景観と風景の違いに関して、景観が環境の単なる「ながめ」とであるとすれば「風景」はそれに審美的態度を重ねていくという関係を示している、また「景観」とは、地表面（水界も、空界も含む）上の一切のものの総合蓄積されたもので、美醜の理念を含まない。「風景」とは風土によって触発される審美的印象をいい、それは歴史的なものもふくめ、全身で享受されるべきもので、社会的関係も大きなウエイトを占める、という考え方を示している。

『環境の美学』⁴⁷⁾では「「風景」「景観」の両語とも関係概念といわれ、主体と客体がなければ成立しない概念であるが、どちらかという、風景は客体をとらえる主体に重点をおき、景観は主体にとられる客体に重点がおかれ、また出自の相違から、景観の場合は視覚中心、眼に見えるものが主たる対象となり、風景の場合は、視覚のみならず、他の五感もかなり大きくとりあげられる」。

山岸健は『社会学の文脈と位相』⁴⁸⁾（1982）で、社会学の観点から、景観を「「土地柄」としてとらえた。「一定地域にみられる景観（土地柄）と集団生活（人柄）とパーソナリティー（心柄）」とは相互に密接に結びついているから、その地域には一つの統一性が生まれ、その地域特有の pressure が存在するようになるのである。だから、他の地域に入ると風が違う。この pressure は authority でもあるといえよう。一定の地域を与えてみると、そこには特定の集団生活が見られる。その集団には特有の思惟行動様式があり、人々の行動は、ふつうその集団の、あるいはその地域の pressure ～ authority の統制をうけながら営まれるものである。その過程で、いわば日常生活の結晶たる生活景観が現われる」としている。

内田芳明は数多くの風景に関する記述をしている。「風景とはなにか」⁴⁹⁾（1992）で、風景の定義として「①風景とは美の段階差の無限性と神秘と偉大さを場所的に現しているもの ②風景はその美なる色彩や形姿に於いて、又それらの変貌に於いて、地上の諸物質と諸生命体の

諸構造に内在する宇宙的生命のリズムを表している。③私たちが風景と名づけている生ける現実、植物の授けによって最も早く地球生命に私たちを導いていくように思われる。④風景とは人間の眼差しの中で、その美としての心的生命の切なる委託を語っている生情にほかならない」としている。また、内田芳明「風景の発見」⁵⁰⁾(2001)で「風景概念のそもそもの原点、即ち自然風景に立ち返らないと思いますし、他方でその場合の人間の心の覚醒、すなわち風景に於いて自然の生命と心を観得する風景感情の覚醒が生ずることが重要です。それは、「景観」のように、主として人間の側の文化的・美的価値尺度の立場、主観性の立場ではなく、風景の他者性への転換、自然の原初性への復帰、が生じなければならないのです。風景という言葉にはなにか平和な状態性、静で親しみある平和的な情景というものがイメージとして含まれているといえるのではないのでしょうか」と記述している。

角田幸彦は文学系分野で「景観」を採用している。理由として、工学・テクノロジー駆使の造形学が向かうのは風景ではなく、景観としている。また、箱庭的な造園学の景観論は景観を撲殺すると述べている。「景観哲学を目指して」⁵¹⁾(1999)のなかで、景観の定義として「景観とは、ひと（或る個人）が歩いたり、立ちどまったりしている時、そのひとの目を通して身体全体に安らかさを与える天蓋と大地の一部が動くまとまり（ゲシュタルト）が自然と文化の共存を伝えつつ、見えないものを湛えて、ひとと響き合う美である。かくして、ひとに詩わせる聖なる静寂である」。「景観は視覚だけに訴えるものではなく、気温、風雨、果樹園や花畑の芳香、鳥のさえずり、さらに川のせせらぎ、踏みしめる道、道端の泉の水を飲むこと等、われわれの五官に関わるものである」としている。

菅原潤が「風景の哲学」⁵²⁾(2002)のなかで次のように述べている、「『知覚経験』が「風景」に転換するためには、見る側の能動的なはたらきが付け加えられなければならない。この記憶のイメージに着目すれば、風景は私の外部から与えられる知覚経験ではなく、その知覚経験を私が加工し構成したものとも言える」「しかも記憶のイメージは、知覚経験のなされる場所に限定されるわけでない。見る側がその見る対象となる土地についてまったく異なる意味づけがなされることもありうる。厳密にいう「風景化」は、現在の知覚経験と過去に記憶したイメージの結合により、匿名的な風景に美的な意味づけをなすことをさしている。こうした「風景化」を最初に発見した人物こそ、「武蔵野」の作者国木田独歩にほかならない」と記述している。

木岡信夫は『風景の論理』⁵³⁾(2007)で、景観と風景に共通の意味要素「景」は、「白日のもとでの見え」を表す。景観は統一的な外見を意味する「観」と結合することで、「まとまりのある事物の見え」となる。地理学的概念である(Landscape)にこの語が充てられたのは、土地の状況が直接的な知覚の範囲を超える現実、かつ客観的可能な実在の拮がり、として意識されているからである。これに対し風景は「風」を意味する雰囲気、気分の要素を含んだ視覚的内容である。この語はしたがって、目に見える現実を通して不可視的な次元にかかわる景観を指示する。景観が客観的で可視的な対象を指示するのに対し、風景は本質的に〈見えないもの〉を指向する。ただこうした区別が成立するのは、あくまでも理念の水準においてであると記述している。

文学系景観（風景）用語の変遷を調べ、その特色として以下のことがあげられる。



図-2 文学系「景觀」（風景）用語の変遷図

文学系分野では「景観」でなく「風景」を使用している例が大半を占めている（図－2参照）。また、風景は人（主体）か物（客体）かという点、人に比重がかかった概念というのが、現在の風景論の中心である。

風景は、古くからの言葉であるが、特に戦前の風景論は志賀の『日本風景論』の影響を受け、そこからスタートしている。戦後になってからは風景を景観と比較して論じている場合が多い。内田は前述のように、風景という言葉には、静で親しみある平和的な情景というものがイメージとして含まれているとして、風景概念のそもそもの原点、自然風景に立ち返り、またその場合の人間の心の覚醒、自然の生命と心を観得する風景感情の覚醒が生ずることが重要と述べている。反対に、角田は工学・テクノロジー駆使の造形学が向かうのは風景ではなく、景観として、能動的に場所の創出を思惟することが必要としている。奥野は自分が生まれ育った幼少時代、青春期の自己形成空間を「原風景」という概念でとらえ、勝原はそれを発展させ、個人の原風景のほかに国民的な原風景が共存し、その形成には国民的伝統も大きく影響すると考察した。また探勝的風景（景観）と生活的風景（景観）に分け、物理的な景観は同じであるが、旅行者と生活者の見た風景は違ったものになることを、明らかにした。1975年に澤田は「風景は目に見える私の環境である」と風景概念に環境の観点を取り入れた。工学系分野の中村良夫は『景観論』（1977）で「景観とは人間を取り巻く環境の眺め」⁵⁵⁾と定義づけ、これは現在工学系以外でも採用されているものである。

(3) 地理学系の概念変遷と植物学系分野、文学系分野との相違点

地理学系分野の景観概念の変遷として、1920年代にドイツ地理学界のラントシャフト（Landschaft）論を日本の地理学界が最新の重要テーマとして、位置づけ導入を図ったことに始まる。そのドイツでのラントシャフト論についての議論は、手塚章「ドイツ地理学におけるラントシャフト論の展開」⁵⁶⁾（1987）に詳しい、それを要約すると以下ようになる。

- ① ラントシャフトの概念は、20世紀のドイツ地理学において、中心的なテーマの一つ
- ② ラントシャフトという語自体が、数多くの異なった意味に用いられる語。ラントシャフトの概念規定が、研究者によりその内容を異にしたりする。概念研究は、地理学の本質にかかわる、理論的問題を含んでいる
- ③ 近世以降、ラントシャフトには、大きく分けると、地区、地域という意味と、風景、景観という意味の2つの系列が並存。20世紀前半におけるラントシャフト論は、これら2つの流れの錯綜もしくは統合としてとらえる

上記のように、Landschaftの概念解釈については、ドイツでも概念や用語法上、不明確であったにもかかわらず、日本でも同時進行的に進められたため混乱をまねくことになった。

Landschaftの様々な概念解釈が行われた。Landschaftの日本での定義例として、岡田は「敗戦前の日本における「景観」概念と「景観」学論」のなかで、①地域（単位）の総合的内容 ②類型としての地域 ③地域の「可視的・形状側面」⁵⁷⁾の3つに分類している。

1925年、辻村太郎（1890～1983）は、地理学評論でパッサルゲの著書紹介⁵⁸⁾の冒頭でLandschaftを風景や景と訳し、「風景を正確に論述することは地理学者の仕事の大部分を占めて

いる」と記述し日本のラントシャフト論がスタートする。1937年、辻村は『景観地理学講話』のなかで、「景観の意義 景観は独逸語の *Landschaft* に対して、植物学者の三好博士が与えられた名称である。*Landschaft* の概念として、大体に於いて眼に映ずる景色の特性と考えて差支ない。混同を防ぐ為に此处では地域の意味を含ませない」⁵⁹⁾とし地理学界で議論をよぶことになり、地理学会以外の景観研究分野にも影響を与えた。『景観地理学講話』が発売される以前の、1935年に発刊された、『大辞典』では、「景観 ①景色。風景美。眺望。②自然と人文とが種々交錯している現実の態様」とされ、地域は含まれていない。

1973年、佐々木博は「地理学辞典」で、景観を次のように記述した。「地理学で用いる景観(=地理景観)とは、「任意の広さの地表断面片であり、その地表面断片は、その外貌と内在する諸現象により、また内外の位置関係によって一定の性格を持つ空間単元で、別の性格を持つ周囲の地表面とは区別して取り出せる」として、これは現在、地理学系分野の標準的な概念となっている。田村百代は1985年、地理学における「「景観」と「相観」－わが国地理学界での混乱」⁶⁰⁾1985)で、「景観」は、現在でも日本の地理学界において景色・風景の意味に利用されることも多く、相変わらず地域と景色・風景との二通りの意味で使用され続けている」としている。

一般的なラントシャフトの地理学系の日本での議論は、①「地域」(同質の像を見せる地域)②「風景」(人間に見える地域の像)の意味が存在する。そのために、問題になるのが①か、②か、①②を包含したものかの議論である。伝統的な地理景観は①となる。

植物学系分野の景観概念は、三好が「植物の景観」の中に、「此景観というのは、独語で、*Fegatations*、*Ansicht*」⁶¹⁾と明記されており、これは、ドイツ語で *Vegetation* (植生)、*Ansicht* (光景、風景、眺め)である。*Vegetation* 植生とは植物の集団であり *Ansicht* 光景、風景、眺めであり、地理学の概念の①「地域」か②「風景」かといえば、②の「風景」である。植物学者としての三好が植物を観察して記述する科学的な風景である。

この意味では、上記の辻村のいう「景観は独逸語の *Landschaft* に対して、植物学者の三好博士が与えられた名称」ということが否定される(小野良平も同様のことを記述している⁶²⁾)。仮に、三好が *Landschaft* を景観と訳したとしても「地域」「風景」のどちらかの意味を指すのかも不明である。また、三好が景観の語を『植物生態美観』で初使用したのが1902年、ドイツから帰国したのが1895年である。ドイツラントシャフト論がドイツで盛んになるのが20世紀に入ってからであり、植物学者の三好がランドシャフトの概念を理解していたか不明であり、年代的に見ても難しいといえる。三好とラントシャフト論とを結び付けることはできない。

地理学系と景観の関係では、辻村は1935年「聚落生態美観」で「今から三十年も前の事であるが、三十年も前の事であるが、三好博士の植物生態美観と云ふ書物を愛読した事がある。植物生態学に開する學界の智識は此の頃から見たら、著しく増して居るかも知れないが、此の本から感した興味は實に新鮮であつて、今でも忘れる事が出来ない⁶³⁾と記述している。この『植物生態美観』は三好が「景観」を初使用した書籍である。また1927年には西亀正夫「地理的景観の個性と通性」⁶⁴⁾で地理的景観と、地理的と限定であるが、景観を地理学系で初使用している。

また、景観生態学は地理学に生態学的な視点を加えたもので、トロールによって1939年に提唱されたもので、現在、植物学（生態学）系、地理学系や造園学系では重要な用語となっている。

文学系分野としては、景観の概念は勝原に代表されるように、「風景は客体をとらえる主体に重点をおき、景観は主体にとられる客体に重点がおかれており、また出自の相違から、景観の場合は視覚中心、眼にみえるものが主たる対象となり、風景の場合は、視覚のみならず、他の五感もかなり大きくとりあげられる」⁶⁵⁾としている。地理学系との比較で言うと②の風景ということであるが、視覚ばかりでなく、風景は視覚以外の、土地への思いや、歴史、文化も含んでいる。

5. おわりに

良好な景観を形成、保全、管理していくための基本として、景観概念を考察した。専門分野の文献をまとめ、それらの景観概念の変遷を比較して、特色を把握し相違点を明確にしたいと考えた。

地理学系は景観研究の初期の時代から概念研究がなされており、伝統的な地理学系分野は「地域」（同質の像を見せる地域）を明らかにする景観アプローチである。これは、見えない文化、伝統、歴史といったものも含めて地域の総合を把握しようとするものである。

一方、植物学系分野の景観としては、

- ① 三好学の「景観」は、ドイツ語フェゲタチオン（Vegetation 植生）と、アンジヒテン（Ansicht 光景、風景、眺め）の2つの概念から成立しており、従来から言われてきた Landschaft の翻訳からではない。
- ② 「景観」の語は三好学によって、1902年に『植物生態美観』で初使用され、ここから景観の歴史が始まる。三好は35年の長期間にわたって「景観」を使用し、多くの他の分野に影響を与える。
- ③ 植物学界では、景観はあまり学術用語として使用されなかったが、近年、三好の「景観」は科学的に地域の景観（客体）を観察し把握しようとして、生態学、地理学と結びつき、景観生態学的に発展している。

文学系分野の景観（風景）としては、

- ① 文学系の景観概念は多様である。文学、社会学、哲学等、それぞれの専門分野を背景に風景（景観）理論を構築している。この分野では景観より風景を採用している例が圧倒的に多い。
- ② 志賀重昂の『日本風景論』を出発点として展開していく、近年は、視覚でとらえた対象物の風景よりは、風景として主体としての人に比重をおき、どのように感じたかという、場所への思いや、原風景、心象風景といった点からの考察が中心である。

参考及び引用文献

- 1) 「景観法」、2004、法律第百十号、(号外第百三十号)、40頁、官報

- 2) 下中弥三郎、1935『大辞典』300 頁、平凡社
- 3) 新村出、1965『広辞苑』647 頁、岩波書店
- 4) 佐々木博、1973『地理学辞典』190 頁、二宮書店
- 5) 東京農業大学(編)、麻生恵、1985『造園用語辞典』166 頁、彰国社
- 6) 彰国社、1995『建築大辞典第2版』460 頁、彰国社、建築大辞典第2版は景域が景観から分離している点が異なっている、内容はほぼ同じであるが、第2版を使用した。
- 7) 土木学会、1999『土木大辞典』318 頁、技報堂
- 8) 八杉龍一、(他・編)1996『生物学辞典』
- 9) 上原敬二、1974『造園大系 第7巻 風景・森林』25 頁、加島書店
- 10) 辻村太郎、1937『景観地理学講話』1 頁、地人書房
- 11) 小野良平、2008、三好学による用語「景観」の意味および導入意図」ランドスケープ研究 71-5、433-448 頁
- 12) 三好学、1902『植物生態美観』109-138 頁、富山房
- 13) 三好学、1905『日本植物景観』第一集、丸善
- 14) 三好学、1906「植物の景観」理学界、1 頁
- 15) 「前掲 11) 436 頁」
- 16) 「前掲 14) 2 頁」
- 17) Humboldt, Alexander von, Ansichten der Nature mit Wissenschaftlichen Erläuterungen (初版は 1808)
- 18) 「前掲 12」
- 19) 三好学、1904『新編植物学講義』富山房
- 20) 三好学、1905『日本植物景観』第一、第二、三集。1906 第四、第五、第六集。1907 第七、第八集。1909 第九、第十、第十一、第十二集、1909 第十三集、第十四集。1914 第 15 集。丸善
- 21) 「前掲 14」
- 22) 三好学、1908「印度ダーザリンの植物景観」東洋学芸雑誌、25-319 頁。1909「ヒマラヤ山林の植物景観 (一) (二)」理学界 8-1、6-9 頁、理学会 8-2、6-9 頁。1927「ハワイノ植物景観及び天然紀念物」内務省、1927
「布哇の植物景観」科学知識 7-9、24-27 頁
- 23) 三好学、1923「十和田湖の植物景観」国立公園 8-12、4-7 頁。1930「日光の特殊植物景観に就いて」国立公園 2-5、4-5 頁
- 24) 三好学、1934「日光国立公園の景観」国立公園 6-12、5-9 頁。1936「十和田湖国立公園の景観」国立公園 8-12、4-7 頁
- 25) 沼田真、1992「視覚的な景観と複合的な景相」図書 8、29 頁、岩波書店
- 26) 沼田真、1994『自然保護という思想』、64-66 頁、岩波書店
- 27) 沼田真、1996『景相生態学』まえがき、1-3 頁、岩波書店
- 28) 三好学、1912『増訂植物生態美観』註補 5 頁、富山房
- 29) 小野良平、2008、三好学による用語「景観」の意味および導入意図」ランドスケープ研究 71-5、438 頁
- 30) Meyer-Abich, Herausgeben.1969, Alexander von Humboldt, Ansichten der Nature.Reclam, Ideen zu einer Physiognomik der Gewächse 77 (原書 1808)
- 31) 「前掲 25」

- 32) 「前掲 27) まえがき ii 頁」
- 33) 今田敬一、1937、「風景論の著書」風景 4-6、226-230 頁
- 34) 志賀重昂、1894『日本風景論』政教社
- 35) 小島烏水、1905『日本山水論』隆文館
- 36) 伊藤銀月、1910『日本風景新論』前川文栄閣、18-19.366-367 頁
- 37) ウィルリ・ヘルパッハ、渡辺徹（訳）1915『風土心理学』・大日本発明協会、327 頁
- 38) ジョン・ラバック（エイペリー卿）. 板倉勝忠（訳）、1921『自然美とその驚異』184 頁、岩波書店
（原書：LORD AVEBURY “The Beauties of Nature and the wonders of the World We live In” MACMILLAN AND CO、1920（初版 1892）、128 頁）今田敬一は「前掲 31」のなかで、「志賀氏は、当時エイペリー卿の著書を読破し、「日本風景論」は幾分を卿に負うところもある」の記述がある。
- 39) 渡辺十千郎、1924『風景の科学』新光社
- 40) 和辻哲郎、1935『風土』岩波書店
- 41) 安倍能成、1937「日本風景と国民性」、『日本風景読本』風景協会、97 頁、古今書院
- 42) 脇水鐵五郎、1939『日本風景誌』河出書房
- 43) 稲垣光久、1961『日本のこころ』192-193 頁、協同出版
- 44) 澤田允重、1975『認識の風景』30-31 岩波書店
- 45) 奥野健男、1972『文学における原風景』45 頁、集英社
- 46) 勝原文夫、1979『農の美学』iii. 4-5. 20-21. 42 頁、論創社
- 47) 勝原文夫、1999『環境の美学』5-6 頁、論創社
- 48) 山岸健、1982『社会学の文脈と位相』16 頁、慶応通信
- 49) 内田芳明、1992『風景とはなにか』58-67 頁、朝日新聞社
- 50) 内田芳明、2001『風景の発見』7-8 頁、朝日新聞社
- 51) 角田幸彦、1999『景観哲学を目指して』75. 81-82 頁、北樹出版
- 52) 安彦一恵、2002『風景の哲学』105 頁、ナカニシヤ出版
- 53) 木岡信夫、2007『風景の論理』52 頁、世界思想社
- 54) 吉江喬松、1922『自然美論』春秋社
- 55) 中村良夫、1977『景観論』2 頁、彰国社
- 56) 手塚章、1987「ドイツ地理学におけるラントシャフト論の展開」筑波大学、人文地理学研究 XI、139-158 頁
- 57) 岡田俊裕、1987「敗戦前の日本における「景観」概念と「景観」学論」人文地理、39-5、449-452 頁
- 58) 辻村太郎、1925『紹介及び批判』地理学評論、1-9、66 頁
- 59) 辻村太郎、1937『景観地理学講話』1 頁、地人書館
- 60) 田村百代、1985 地理学における「「景観」と「相観」－わが国地理学界での混乱」・地理学教室創立 60 周年記念会編「地域の探求」421-430 頁、古今書院
- 61) 「前掲 14」
- 62) 「前掲 11」438 頁」
- 63) 辻村太郎、1935「聚落生態美観」聚落地理論文集. 地理教育研究会編、1 頁
- 64) 西亀正夫、1927「地理的景観の個性と通性」地球 8-3、38 頁
- 65) 「前掲 46」

Changing Concepts of Landscape (Keikan) Used in Different Fields

-With a special emphasis on fields related to botanics, and geography-

Akio Watanabe

Abstract: The Japanese Landscape Law enacted in 2004 added a legal definition to the term *keikan* (“landscape”). However, before then the term had been used in many fields in different ways. Developing different processes of introduction and usage of the word, each field has its own concept of landscape. This study traces different transitions of the concept by field, and clarifies their differences. The word *keikan* is thought to have originated with Manabu Miyoshi around 1900. Since then, it has been used as a general or technical term in a range of fields such as the humanities (literature, philosophy, art, others), botany (botany, ecology), geography, landscape architecture (open space planning, agriculture, and horticulture), and engineering (architecture, civil engineering, urban engineering, environmental engineering).

There are two major streams to the concept of landscape, which is based on the German concept of *landshaft*. The word “*landshaft*” has two meanings: (1) regions (sharing common images) and (2) scenery (regional images visible to the human eye). Geographical landscape is categorized into (1), and geography is one of its fields.

The second meaning is used to refer to aspects of landscape in fields other than geography. The concept places an emphasis on visibility to the human eye, such as the “*scape*” of landscape, *kan* (“looking”) of *keikan*, or scenery. In this second meaning, looking at an object means visually grasping it as environment. Focusing on the sense of sight, a simple but effective human sense, to help understand changes in and qualities of the environment, Yoshio Nakamura in the field of engineering defines landscape as “views of the environment surrounding human beings” (1977). This definition has been supported widely as highly generalizable, even in fields other than engineering. However, problems still remain with respect to the evaluation of imperceptible *keikan*, such as that in the fields of history, culture, and tradition.

Keyword : *keikan*, landscape, *landshaft*, change in the concept of landscape, concepts of landscape by field